

平成 30 年度 国立中央青少年交流の家

富士のさと ボランティア養成研修

平成 30 年 6 月 16 日（土）～6 月 17 日（日） 1 泊 2 日

○目的

青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

○参加者

自然体験活動やボランティア活動に興味・関心のある
高校生，大学生，社会人

計 33 名（内訳：男性 17 名，女性 16 名）



○事業の内容

（1）「国立中央青少年交流の家とは」 当所所長 宮崎康之

青少年教育施設の教育機能や役割，運営について教育基本法や教育振興基本計画を基に学んだ。また，国立青少年教育振興機構の概要を知り，国立中央青少年交流の家はどんな目的で設立，運営されているのかについて理解を深めた。



（2）「アイスブレイクでお互いを知ろう」

当所企画運営ボランティア

本研修の企画運営ボランティアが考えたアイスブレイクゲームを行い心と身体の緊張をほぐした。アイスブレイクを実施するときにはどんな順番で行うのか，指導者としての心構えについて実践を通して学んだ。



（3）「子どもたちの“いま”を知る」

講師：常葉大学短期大学部 准教授 遠藤知里 氏

“いま”の子どもたちの好きなもの“いま”の子どもたちのいいところ等についてワークショップを通して参加者同士で意見交換をした。子どもの好きなものは何かを考えることで，子どもたちの“いま”が見えてくることに気づいた。



（4）「野外炊事のいろは」 当所企画指導専門職 土屋貴弘

施設内に配置された食材カードを地図を頼りに仲間と協力して探す「フードハンティングラリー」を体験した。その後，獲得した食材でカレーライス作りを行い，野外炊事の進め方と安全管理の方法について基本的な技術を身につけた。



（5）「ボランティア活動の実際を知る」

当所企画運営ボランティア

様々な場面で活躍している企画運営ボランティアから実際のボランティア活動をしている話を聞いた。日常と非日常についてグループワークを通して考えを深め，ボランティアの価値観を広げるとともに，今後の活動への意欲を高めた。



(6) 「野外炊事の朝食～牛乳パックで朝ごはん～」

当所企画運営ボランティア

朝食作りは企画運営ボランティアが考え、洗い物が一切出ないクッキング方法であるカートンドックを実施した。「今回の朝食では、何故カートンドックにしたのか」について指導者目線で考え、討議を行った。



(7) 「キャンプで実際に起きる傷病の応急処置」

講師：フジ虎ノ門整形外科病院 看護師 杉浦信志 氏

実際に起こりうる傷病発生の現場で、傷病者役とリーダー役を決めて咄嗟の応急処置ができるかロールプレイを行った。その後、正しい処置の仕方について実際に病院に勤めている看護師よりレクチャーを受けた。



(8) 「ボランティア活動の意義と心構え」

当所ボランティアコーディネーター 荒川大佑

当所でボランティアをするメリットは何か？についてワークショップを行い、ボランティアの意義について話し合った。また、ボランティアをする上で、心と身体の安全管理が大切なことや指導と支援の区別が必要なことを学んだ。



《参加者の感想》

- ・ 学校とは違い正解のない問題をグループワークで考え、自分たちなりの答えを出せた時、新しい発見がいくつもありました。(大学生)
- ・ ボランティアは無償支援というイメージが強かったです。しかし、研修を通してボランティアは奥が深いことを感じました。指導者、自分の成長、ふれあい、感受性など、様々な面をみせてくれるボランティアは魅力的だと思いました。(大学生)
- ・ 最初は不安でしたが二日間とても充実して楽しかったです。普段、聞くことのできない大学生の話の聞けたり、非日常を味わうことができました。ボランティアって何だろう？と思っていた私でしたが、自分を見つける、仲間を見つけるなど、たくさんの気づきがありました。(高校生)
- ・ このような研修に参加させていただくとき、親の立場では、子どもたちのことを真剣に考えてくださる方々が大勢いることに、深く感謝し嬉しく思います。キャンプに子どもが参加できるのは、保護者の理解があつてのことです。ぜひ、そのような保護者の方々をリスペクトしていただき、社会のさらなる理解を進めていただければと思います。(社会人)

《成果と課題》

- 例年、参加者の内訳は大学生が多かったが、今年度のボランティア養成研修は高校生の参加者も多く社会人の参加も複数名あった。話し合いでもそれぞれの立場から多様な意見を聞くことができ、普段関わる機会が少ない世代との交流をする機会となった。
- 企画運営の一部を実際に活動しているボランティアスタッフに担ってもらうことで、活動の実際の声を参加者へ届けることができた。参加者からは「ボランティアスタッフの方が明るく親切で安心して研修を受けられた。」「同世代の人が活躍している姿を見て尊敬した。私も頑張りたいと思った。」などの声があり、ボランティアスタッフがロールモデルとなっている様子も窺えた。
- 法人ボランティアへ登録した修了者が、実際の活動に参加する機会が限られている。既存の教育事業の他にもボランティアが自主的に集まる機会を増やすなど、継続的に活動することができる仕組みをより充実させていく必要がある。